

英語科における教育実習の現状と課題

～実りある教育実習を目指して～

中 釜 智 子

はじめに

学校教育を巡る言説には賛否両論様々なものがあるが、次代を担う子ども達を育成する上で、その果たす役割と責務が重要であることは、多くの認めるところであろう。近年、国立大学等の法人化論議に伴い、国立の教員養成系大学・学部のある方についても検討が加えられている。言うまでもなく、教員養成系学部の大きな使命の1つとして、力量のある教員を育成し、教育の現場へ送り出すことが挙げられる。その中で、教育実習は教育現場を直に体験し学ぶものとしてカリキュラムの重要な一端を担っている。筆者は、附属学校に勤務するものとして教育実習に関わってきたところであるが、その中で様々な課題意識を抱くようになった。本稿では、教員養成カリキュラムの1つである教育実習について、主に英語科の観点から現状をとらえ、より良い実りある実習とするための課題を明らかにしていきたいと考える。

1. 鳥根大学教育学部における教育実習の概要

(1) 教育実地研究

本学部の教育実習実施計画書によると、教育実習を学部の主体的な研究・教育活動として教員養成カリキュラムの中に段階的に位置づけ、学部の専門教育(研究)と教育実習(実践)との有機的関連を図るとともに、教育実習の事前・事後指導の充実を目的として「教育実地研究」(2,3年次必修,4年次選択)を置くこととしている。

(2) 附属中学校で実施される教育実習の位置づけ

本学部の附属中学校で実施される教育実習は、2年次の秋に行われる教育実地研究Ⅰと、3年次の前・後期にそれぞれ1週間と4週間に分けて行われる課程必修実習Ⅰ・Ⅱの2つに大別されている。

① 教育実地研究Ⅰ

前者の内容は、同計画書によると、講義および観察をとおして、学校の組織・運営、教育活動の実

際、児童生徒の実態についての基礎的な認識を培い、教職への意欲と自覚を高めさせるというものである。附属中学校においては、2時間の授業観察を行い、その後大学で3時間程度の記録整理等を行った後、再び中学校で授業についての研究協議を行うようになっている。

② 課程必修実習Ⅰ・Ⅱ

3年次に行われるこの実習が学生が平素「教育実習」と呼びならわしている実習にあたる。同計画書によるとその目的・目標として

- ◎教育作用の全般的な理解を深めると共に、教師としての基礎的な知識・技能を修得させる。
- ◎教師としての自覚を促し、教育者としての使命を持たせる。
- ◎学部において修得した教育理論を教育実習において再編成するとともに、新しい研究課題を発見させる。

の3つが挙げられている。

2. 「教育実習」を通して何を学ぶか

(1) 課程必修実習Ⅰ・Ⅱの目的と内容

1999年3月には、「教育実習系カリキュラム」改善の具体的指針として、より具体的に、その目的と内容が示されている。

同指針では、課程必修実習の目的を次の4点としている。

- ①教育的探求に基づく教育理論の習得および構成を促す。
- ②教育技術の重要性を理解しその習得を促す。
- ③実践的指導に関わる根本的な力量の形成をはかる。
- ④人間的課題の発見を促す。

その上で、③実践的指導に関わる根本的な力量のうち、教育実習で特に育てたい能力として

ア、「授業構想・学習指導能力」……教育目的や教科目標を十分に理解し、その目標実現のために教科内容を把握し、子どもの実態を考慮しながら授業を進めようと努力する。

イ、「観察・診断能力」……子どもの実態を個別的・集団的に把握し判断しようと努力する。

ウ、「関係形成・応答能力」……子どもと豊かな関わりを作り上げようと努力する。

エ、「組織的経営・活動創造能力」……諸活動を通して子どもと子ども、子ども集団を組織し、その組織化によって創造的な活動へと結び付けようと努力する。

オ、「実践分析・評価能力」……様々な要素や条件を考慮しながら、教育実践を総合的に判断し、分析・評価できるよう努力する。

の5つを挙げている。

実習の形式および内容としては、課程必修実習Ⅰを「観察・参加実習」とし、課程必修実習Ⅱを「教壇実習」と位置づけている。つまり、3年次後期の実習においては、実地の教科指導・生活指導を行い、その指導法の基礎の習得に重点を置くこととし、具体的には次の3点を含むとしている。

- ・学習指導案の立て方を理解し、立案できるようになる。
- ・指導技術の基礎を身につける。授業の展開、発問、応答、板書、話し方、教材・教具の活用など。
- ・発達段階に即した子ども理解の基礎を培い、それを踏まえた接し方を体得する。

またこの他に、教育界の新たな課題に対応する実習内容や学習指導要領の改訂に伴う実習内容も必要としている。

(2) 実習生の期待とニーズ

上述のような目的を持って実施される教育実習であるが、実際に実習に来る学生達は、実習に何を求めているのだろうか。課程必修実習Ⅰの開始時に、「実習で身につけたい力」について、自由記述でアンケートを実施した。これを、「教育実習系カリキュラム」改善の具体的な指針、課程必修実習の目的（以下「指針：実習の目的」と略記）によって分類すると次のようになった。

「実習生が教育実習で身につけたいと考える力」

(2001. 6. 4 実施。対象：第2学年配当実習生2名)
なお、()内の数字は各項目に該当する回答数

①教育理論の習得および構成に関するもの(0)

②教育技術の重要性の理解と習得に関するもの(0)

③実践的指導に関わる根本的な力量の形成に関するもの(合計11、内訳は下記の通り)

ア、授業構想・学習指導能力に関するもの(5)

- ・授業をうまく組み立て、実行し、成功させる力
- ・英語の能力の向上と、教育の場で使う classroom Englishなどを適切な状況下で使える力
- ・「黒板を見て写す」だけのような授業でなく、みんな active に活動できる授業をする力
- ・マニュアル通りにするのではなく、多少目的に外れたとしてもみんなが積極的に参加する(しやすい)ような授業をする力
- ・おそらくトラブルもあると思うので、その場でパニックにならず落ち着いて対処できる力

イ、観察・診断能力に関するもの(1)

- ・生徒の本質を見抜く力

ウ、関係形成・応答能力に関するもの(3)

- ・様々なタイプの生徒に合わせられる柔軟性
- ・生徒に好かれる自分(を発見したい)
- ・中学生との触れ合い

エ、組織的経営・活動創造能力に関するもの(0)

オ、実践分析・評価能力に関するもの(2)

- ・失敗を次回の成功へつなげられるような力
- ・他の先生方や教生さん達の授業面、生活面、指導面のよいところを盗み、自分の力に変えられるような力

④人間の課題の発見に関するもの(1)

- ・上下関係を必要最低限尊重しつつ、決して他人を軽んじたりしないような力

⑤その他(3)

- ・自分の生活を見直し、実習を通して新しい自分を見つけない
- ・学んだどんな小さなことでも、何かしらの場面で役立てることのできる力
- ・忍耐力と敬語(敬語が最大の課題である。)

(3) 現職教員から見た教育実習の効果

(1), (2)では学部および学生が教育実習に望むものを見てきたわけであるが、では実際に教育実習を経験し現在教職にある教員は、教育実習で何が有効であったと感じているであろうか。アンケート結果を「指針：

実習の目的」によって分類すると次のようになった。「教育実習で学んだことのうち、現在教職で役立っていること」(2001.11.7実施。対象：平成13年度島根県新規採用英語科教員4名)

- ①教育理論の習得および構成に関するもの(0)
- ②教育技術の重要性の理解と習得に関するもの(0)
- ③実践的指導に関わる根本的な力量の形成に関するもの(合計17,内訳は下記の通り)

ア、授業構想・学習指導能力に関するもの(12)

- ・指導案の書き方
- ・教材研究の大切さ(2)
- ・コミュニケーション活動の大切さ
- ・コミュニケーション活動をどのように取り入れたらよいのかということ
- ・板書についてなど基本的なこと
- ・classroom English の入れ方
- ・教科書を使わないで、新出の文型・文法をどのように導入したらよいのかということ
- ・新出語句の示し方
- ・新出文型の示し方
- ・いかにして生徒達を授業に引き込むか
- ・ALT との Team Teaching

イ、観察・診断能力に関するもの(0)

ウ、関係形成・応答能力に関するもの(5)

- ・生徒と友達という関係だけではいけない、ということ。実習は短く、いかに生徒と仲良く接するかを考えていたけど、それではいけないと教官に言われ、実際現場にいるとその言葉の意味がわかった。
- ・生徒への声のかけ方
- ・生徒とたくさん話をして、様子を知ること。
- ・声がけをすることによって輪も広がるし、だんだんと信頼関係もできるということ。
- ・生徒との関わり、先生方とコミュニケーションを図ることの大切さ。

エ、組織的経営・活動創造能力に関するもの(0)

オ、実践分析・評価能力に関するもの(0)

④人間的課題の発見に関するもの(0)

⑤その他(4)

- ・自己研修の大切さ
- ・出勤簿に印を押す習慣
- ・働くということの大変さ
- ・生徒達の顔が教科ごとに違うということ。

なお、この4名のうち3名の実習校は他大学附属か公立中学校であり、この結果は必ずしも本学部での教

育実習を反映したものではない。また、教育実習で学んでおきたかったこととしては、

- ・新出事項の導入のバリエーション
- ・附中ではほとんど教科書を使用される場面が見れなかったので教科書を使用する場合の展開・指導方法も知りたかった。
- ・コミュニケーション活動についての回答があった。

(4) 教育実習で養成したい態度と力

上記2つのアンケート結果を、「指針：実習の目的」と照らし合わせてみると、次のことが言える。

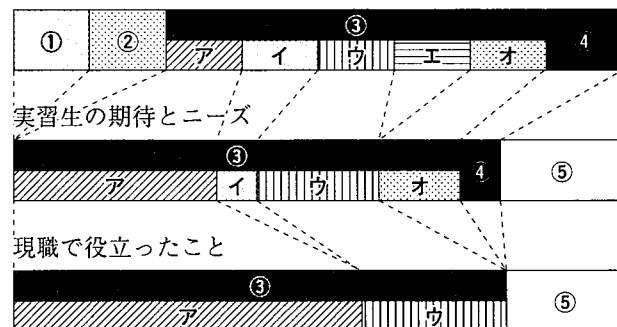
○「指針：実習の目的」で教育実習の目的として挙げられた内容のうち、①教育理論の習得と構成に関するものと②教育技術の重要性の理解と習得については実習生も現職教員も共に記述がない。

○③実践的指導に関わる根本的な力量の形成に関するものについての記述が実習生、現職教員共に大半を占めている。

○ただし、その中で③エ、「組織的経営・活動創造能力」については、実習生、現職教員共に記述がない。

○現職教員にあっては「教育実習で役立った」と感じることが③ア「授業構想・学習指導能力」ウ「関係形成・応答能力」に集中しており、それ以外に関しては記述がない。

「指針：実習の目的」を均等に割付したものの



これらのアンケートについては実施対象が非常に少なく、かつ限られているため普遍的な意味を持つとは考えられない。しかし、このような傾向をもった学生が実習に来ていたというのは事実であり、平成13年度島根県教員採用試験を経て県内で教職にある現職が教育実習についてこのように感じているということも事実である。また、いずれのアンケートも自由記述の形をとったので、特に印象に残っていたり、意識されていることのみが記述に現れていると考えられる。したがって、この結果をもって、例えば①や②の力は教育

実習では養成されない、と断ずることはもちろんできない。

教育職員養成審議会第1次答申(1997)では、教員の資質能力の形成に係わる「養成・採用・現職研修」の役割分担の中で、養成段階では「生徒指導等に関する『必要最小限な資質能力』(採用当初から学級や教科を担任しつつ、教科指導、生徒指導等の職務を著しい支障が生じることなく実践できる資質能力)を身につけさせるとしている。その上で、養成段階で特に教授・指導すべき内容の範囲として

- 教職への指向と一体感の形成
- 教職に必要な知識および技能の形成
- 教科等に関する専門的知識及び技能の形成を挙げている。

これらのことを考えあわせると、教育実習では、学生からの期待度も高く現職も役立ったと感じている③実践的指導に関わる根本的な力量の形成に関する事項に重点を置きつつ、その中で実習生が現場でなくては体験することのできない教職への一体感を味わい、教職への指向を高めることが優先的なねらいとして挙げられるのではないだろうか。

ただし、高旗(1997)が指摘しているように、実際には、教職を必ずしも志望しない学生が「教育学部に多数流入し」ている現実があり、「とりわけ教育実習における『学び』の不成立は深刻と言わざるを得ない。」という。しかし、これらの学生に対しても教育機関として学習の機会を保障する必要がある。教職への指向を持っていない学生に対して、どのような学習の場を「教育実習」が提供できるか、あるいは提供すべきか、提供すべきでないのかについては、更なる検討の必要があろう。

3. 教育実習生への支援の見直しと工夫

(1) 学部からの問題提起

教育実習生の日記記述を通して、教育実習中に実習生が直面する問題を分析した築道(1996)は、その中で、指導教官の助言に関して、

- ・実習生に共通するものが多いこと
- ・教育実習前半と後半において大きな違いが見られないこと

の2点を指摘した。その上で、このことは、多くの問題点が解決されないままに実習生が教育実習を終えているということを意味しているとし、実習により自分にはこのような力が身に付いたという成功体験も実習生には保証する必要があると指摘している。また、実

習生が指導教官から指摘される問題を

- ア、基本的な指導技術
 - イ、熟練を要する指導技術
 - ウ、教師としての信念、姿勢
- の3つの観点から分類し、指導教官からのおびただしい数の指摘は実習生を当惑させるだけに終わる危険性があり、特に実習当初においてイヤウに関する指摘を受けた場合、多くの実習生は解決の糸口をつかめないのではないかとの危惧を表明した。

(2) 教育実習生への支援の見直し

この示唆に富む指摘を受けて、教育実習生への支援のあり方について見直しを行った。

まず、問題点の1つとして挙げられた、教育実習期間中を通して同じ内容の助言や指摘が多数続くこととされたことについて、いきなり全ての項目の達成やゴールを目指さず、一つひとつ達成できそうなスモールステップを設定し、達成感を味わいながら実習を進められるように配慮するようにした。

もう一つの問題点として挙げられた、実習当初にも、熟練を要する指導技術や教師としての信念・姿勢についての指摘がある、とされた点については、まず、何が「基本的な指導技術」で何が「熟練を要する指導技術」なのかを洗い出すことから始めた。例えば、「基本的な指導技術」であるとされた、明確な指示や、「熟練を要する指導技術」であるとされた評価言(誉め言葉)や机間巡視等については、論の分かれるところであろう。その上で、これについても段階的に指導助言を行うように配慮するようにした。

(3) 教育実習生への支援の工夫

見直しを行った点も含めて、教育実習生への支援について心がけていることは次の通りである。

①授業の構想段階～学習指導案作成

- その実習生の持ち味や良さが発揮できるような授業を構想するよう、助言する。
- 授業の構想を練る際、実習生自身が自分で教材研究し、考えるよう励ます。
- 案を示す際には、可能な限り複数の案を示し、実習生が各々の長短所を考えて選択・決定できるよう配慮する。
- 実習生は軽視しがちであるが、学習指導案の基盤の部分は授業者のものが見方と現れるところであり、授業の成否に深く関わっている。ここをじっくり考えるよう助言する。

②授業の準備

○教材・教具の作り方や使い方について、具体的に理由も示しながら助言する。(字の濃さ、大きさ、色、書く位置、線を入れる位置等)

○授業で使う例文や英語スピーチ草稿のチェックは必ず行う。

これをしておかなかった場合、授業中に誤った英文を例文として板書したり、プリントにして配布してしまうおそれがある。また、生徒の実態と照らし合わせて不適切な内容もここでチェックする。

○空き教室を使って、板書計画の検討を行うよう助言する。

紙上の板書計画だけでは、実際の授業場面でうまくいかないことがある。我々現職にあっても準備段階でこれをしておくと有効であり、実習生にも勧めている。

○授業場面に沿って、どのような発言や発問をするか具体的に考えておくように助言する。特に実習初期は、構想段階で実際に口に出して言うようアドバイスする。

③授業中

○授業記録をとる際は必ず良い点、改善すべき点と、前回の授業研究で課題設定したことについてどうであったかを記録する。

④授業後の授業研究会

○授業研究会は原則として学年配当実習生全員で行う。

このねらいはまず授業を見る視点を磨くことと自分の意見をわかりやすく、相手に伝える練習にある。そしてもう1つの大きなねらいは良い点、改善すべき点をお互いに率直に話し合え、より良い実習を目指すことのできる仲間作りである。これは現場で最も必要とされる資質の1つである。

○参加者は、授業の良かった点、改善すべき点の両方に言及する。改善すべき点については、できるだけ自分ならという観点からその改善案を述べる。

○一度に多くを指導せず、段階的に指導する。

○次時に達成できそうなことを1つは次時の課題として挙げる。

○次時には達成できそうになくても、実習生の意欲や能力に応じて、実習終了時まで達成してほしいことを示す場合もある。

○人権に関することについては、時を待たず必ず指導する。

○前回に比べ、良くなった点は必ず取り上げる。

○改善すべき点については、指摘に終わらせず、その

解決策としてどのようなものがあるか例示する。その際、できるだけ複数例を示し、実習生が自分で意志決定できるよう援助する。

○あるいは実習生の力量に応じて、示唆にとどめる場合もある。(例：このことについては、美術の授業観察をしてみるといいヒントが得られるかもしれませんよ。授業をビデオかテープに撮って見てみる。等)

○最後に、次時の課題を授業者本人と確認する。

⑤その他

○できるだけ他教科の授業も観察するように助言する。

英語科とは異なる生徒の一面が見られ、生徒理解が進んだり、英語以外の教科の指導技法を参考にできるといった効果が期待できる。このことは現職にあっても同様に、他教科の授業を観察することは自らの学習指導を見直す上で大変有効である。

○その年度の実習生の数にもよるが、可能な限り同一指導案で複数回授業を実施し、クラスの違いによる授業の流れの違いを実感したり、前回の反省を生かせる場があるようにする。

4. 「教育実習」の実際

(1) 附属中学校における実習全体の流れ

附属中学校では、後掲の表のように実習全体の流れが組まれている。その中から英語科に関わるものを抜き出すと次のようになる。

| |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業観察 (全期間) ・ 指導教官との TT (第1週) ・ 実習生同士の TT (第2週) ・ 実習生1人で行う授業 (第3～4週) |
|--|

平成13年度の場合、実習生1人あたりの実施授業数は、

| |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 指導教官との TT…… 1指導案×2クラス ・ 実習生同士の TT…… <li style="padding-left: 20px;">(自分がメイン・サブの指導案) × 2クラス ・ 実習生1人で行う授業 <li style="padding-left: 40px;">…… 2指導案×2クラス |
|--|

の合計10時間であった。

平成13年度第2学年配当実習生の協力を得て、課程必修実習Ⅰ・Ⅱの実際を以下に追ってみる。

前期実習内容与时数

| 内 容 | | 実習生 A | 実習生 B |
|------------|------------|-------|-----------------|
| 授 業 観 察 | | 13 | 15 |
| 内 訳 | 英 語 | 10 | 10 |
| | そ の 他 | 3 | 5 |
| | 道徳・音楽・総合学習 | | 数学・地理・歴史・体育・国語 |
| 教材研究・指導案作成 | | 2 | 2 |
| 指導教官とのTT | | 2 | 2 |
| 授 業 研 究 | | 2 | (2 ただし実習簿の記録なし) |
| 合 計 | | 19 | 19 |

(2) 課程必修 I (前期 1 週間)

①実習の内容与时数

実習日誌の記録から見ると、それぞれの実習生が英語授業に関して勤務時間内に行った実習は次ページに挙げた表の通りである。

②実習生の感想

実習生の感想 (自由記述) は以下の通りであった。

実習生 A (記述項目合計11)

○プラス (達成感・満足感) の記述 (1)

・充実していた。

○マイナス (不安・困難) の記述 (4)

- ・2度の授業を通して、教壇に立つことの難しさがひしひしと身にしみた。
- ・授業の構成をいくら粘っていいものにしてもそれ通りには進まないことへの不安感
- ・どんなにがんばって考えても納得いくものにまとまらない教案へのいらだち
- ・最も痛感したのは自分の英語力不足

○課題の把握に関する記述 (6)

- ・生徒全員への配慮という面で課題が残った。
- ・生徒の立場に立って、板書計画や発言・対応を考えなければならないと思う。
- ・責任を持って物事を教えなければならない「教員」としての力をもっとつけなければならない。
- ・次回の実習の目標は「生徒がついてくる授業」
- ・生徒の立場に立った上でのいい授業がしたい
- ・そのためにも、より深い知識を探求し、身につけ、また活用できるだけの、指導者としての力を磨いていかなければいけないと思う。

実習生 B (記述項目合計11)

プラス (達成感・満足感) の記述 (1)

○2回目の授業は前回の反省をふまえて自分のクセを

意識したり、生徒のことも多少配慮したが～

○マイナス (不安・困難) の記述 (5)

- ・初めての授業で生徒のことは全く考えられなかった。
- ・教案を作ることに精一杯で「うまくやれるか」や「時間配分はどうか」ということしか考えられなかった。
- ・自分の緊張と戦いながら文法を教えることしかできなかった。
- ・2回目の授業は前回の反省をふまえて自分のクセを意識したり、生徒のことも多少配慮したが、声の大きさや指名の位置など、まだまだ足りなかった。
- ・生徒のことを気にして文法説明がおろそかになったり、例文練習をぬかしてしまった。

○課題の把握に関する記述 (3)

- ・いくらずばらしい指導案があっても、それを教える人によって生徒が理解できるかできないか、またこれから生徒が英語を好きになるか嫌いになるかが決まってくる。だから私自身がもっと生徒のことを考えて「彼らのための授業」をするようにしたい。
- ・もっと英語に関する最低の知識だけは身につけ、それに+αの知識をつけていくようにする。
- ・生徒に聞きやすく、わかりやすく英語を理解させるために日本語の使い方を見直すと共に、とっさでもきちんと英語がでるようにしたい。

(3) 課程必修 II

①実習の内容与时数

実習日誌の記録から見ると、それぞれの実習生が英語授業に関して勤務時間内に行った実習は次ページに挙げた表の通りである。

前期は2名とも実習内容・時数ともほぼ等しいのに対し、後期になると英語に関わる合計時数と授業時数はほぼ等しいものの、それ以外の内訳と比重のかけ方

後期実習内容と時数

| 内 容 | | 実習生 A | 実習生 B |
|------------|-------------------------------|--------------------------------|------------------------------------|
| 授 業 観 察 | | 29 | 38 |
| 内 訳 | 英 語 | 18 | 24 |
| | そ の 他 | 11 | 14 |
| | 数学2・理科2・音楽2・学活2・ 家庭科・道徳・総合 | | 歴史3・理科2・音楽2・保健2・ 国語・地理・体育・道徳・総合 |
| 教材研究・指導案作成 | | 25 | 25 |
| 英 語 授 業 | | 8 | 8 |
| 授 業 研 究 | | 8 | 5 |
| そ の 他 | | 7 | 1 |
| | | 授業練習1, 指導教官の授業準備手伝い2, 実習全体の反省4 | 内容の記述なし |
| 合 計 | | 77 | 77 |

はそれぞれの実習に対する取り組みの違いによって変化が見られる。

例えば実習生 A の場合、授業の前に空き教室を使って授業の練習をしたり、正規の授業研究会の他に、参観実習生と自主授業研究を行ったりという取り組みが見られた。実習生 A は③で後述するように「指針：実習のねらい」のオ、実践分析・評価能力に関する力が身についたと自己評価している。

実習生 B の場合は配当学級の授業を数多く参観する傾向が見られた。実習生 B はウ、関係形成・応答能力に関して生徒との温かな関わりができたと言っていた。

また2名とも前期に比べ、1授業あたりに費やす教材研究の時間が格段に増えている。このことは、実習を通して教材研究の重要性を理解できたことの1つの現れであろう。実際に、前半の実習日誌の記述の中には

- ・授業を甘く見ていた
- ・事前の準備が大切だとわかった

というものが見られ、授業改善のためそれぞれの実習生が努力したことは実習生の様子を見ていてもよくわかった。

②実習生の感想

実習生2名が実習を通して身に付いた・学んだと感じたことについての自由記述を「指針：実習の目的」によって分類すると次のようになった。

(2001年9月28日実施。対象：第2学年配当実習生2名)

- ①教育理論の習得および構成に関するもの(0)
- ②教育技術の重要性の理解と習得に関するもの(2)

・前回できなかった feed back が自然にできるようになった。(バリエーションは課題)

・生徒の、授業に向かう姿勢を見て、授業の流れや方法を変えたりして集中させる技法を持つておく必要があることを知った。

③実践的指導に関わる根本的な力量の形成に関するもの(合計7,内訳は下記の通り)

ア、授業構想・学習指導能力に関するもの(1)

・今の自分に足りていない能力が全てではないが見え、これからの課題が明確になった。(英語を話す力の向上)

イ、観察・診断能力に関するもの(2)

・授業中に意識して生徒の様子をみれるようになった。
・机間支援が落ち着いて、クラス全体を見渡しながらできるようになった。

ウ、関係形成・応答能力に関するもの(2)

・教壇に立って生徒を見渡したとき、今までになくうれしくてワクワクしている自分を見つけた。
・後期実習が始まったときは、他の大学生はまだ夏休みなのに……とか、中学生となんか仲良くなれない!! と思っていたが、クラスの何人かが積極的に話しかけてきてくれて、次第にそんな気持ちは失せていった。

エ、組織的経営・活動創造能力に関するもの(0)

オ、実践分析・評価能力に関するもの(2)

・自分の行動・発言一つひとつに対して振り返り、悪かったところを反省して次は意識できるようになった。

・失敗したことに対し、悩むだけではなく、どこが悪

かったのかを見つめ、改善策を考える前向きな姿勢が身に付いた。

④人間的課題の発見に関するもの(1)

・先生方や他の教生の授業や生活面から、状況に応じた様々な考え方を学ばせていただき、より多角的なものを見方ができるようになった。

⑤その他(2)

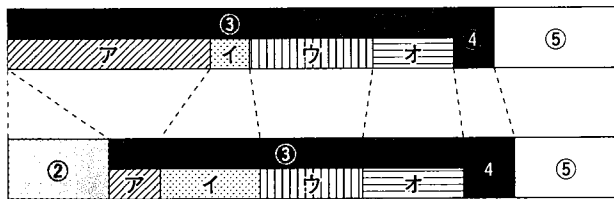
・人前に立つことに慣れた。
 ・もう少しきちんと社会人としての自覚を持たなくてはいけないなあと痛感した。

5. 考察と今後の課題

(1) 実習の前後における実習生の変化

2(2)で挙げた「実習生が教育実習で身につけたいと考えている力」と上記の「教育実習で身についたと思う力」を比較してみると、次のことが言える。

実習生の期待とニーズ



実習で身についたこと

○「指針：教育実習の目的」の②「教育技術の重要性の理解と習得」について、実習前には身につけたいと考える記述がなかったが、実習後には重要性を理解したとの記述が現れた。

○③「実践的指導に関わる力量の形成に関するもの」のうち、エ、組織的経営・活動創造能力に関しては、実習前後共に記述が見られない。

これについては、熟練を要する力量と言え、4週間の教育実習で身につけるのは難しいと言えるのではないだろうか。2(3)にもあるように、現職教員もこの力については実習で学び、現在役立っているとは回答していない。

○③「実践的指導に関わる力量の形成に関するもの」について、実習前はア、授業構想・学習指導力を身につけたいという記述が多かったが、実習後に身についたとする記述は減っている。

指導教官の立場で見ると、この力について、実習当初に比べれば実習後は格段に育成されたと感じるが、実習生側からすると身についたとする評価が少ない。これは1つには実習前には実習に来れば力はつくという期待があったのに対し、実際の実習が応えきれな

かったことの現れでもあろうし、また1つには実習生が現実の厳しさを知り、自己課題を発見したことの現れでもあろう。

○その他の項目については実習前後で記述数に大きな変化は見られない。

○記述内容については、実習前には漠然としたイメージの記述がほとんどであるのに対し、実習後にはより具体的で、自分自身の実習内容に即した記述になっている。現場での自らの体験や学習を通して自己の将来の展望に資するという点で、これは実習の大きな成果であろう。

(2) 今後の課題

①実習生に養成したい力の焦点化・重点化

今まで見てきたように、実習のねらいのうち、現在の教育実習の在り方のなかでは達成されやすいものと達成されにくいものがあることがわかった。

「指針：実習の目的」に示された教育実習のねらいを達成するための工夫・実践を重ねると同時に、教育実習を通して特に実習生に養成したい、あるいは教育実習がその養成に有効である「力」を明確にし、養成を図っていく焦点化や重点化も今後必要となってくるのではないだろうか。

限られた時間の中では「あれも、これも」というのは現実的な話ではない。指導教官は教育実習生の指導と同時に義務教育機関の教員としての任務もこなしており、中学生の教育に対する大きな責任を負っている。当然のことではあるが勤務時間の5時を過ぎると退勤していく実習生が増え、それまでに実習生の指導案作成支援や授業研究を終えざるを得ないという現実がある。自らの納得するまで指導案を練り、授業準備にあたる実習生ばかりではないというのが実際のところである。その中で、中学生に対して学力を保障する授業を提供していくことは大変重要な案件であり、構えとしてここは譲れないところである。中学生の健全な育成と学びを大切にしつつ、実習生にとっても有用で、達成感の味わえる教育実習にするためにも、養成を図る力の焦点化・重点化は必要ではないだろうか。

そのために、三浦(他)(1998-2001)で具体的に検討されているように、本学でも学部と協力して、英語4技能や教育技術についての学生の実態を明らかにし、養成を必要とする力を検討したい。

②実習生の主体的な学びを支援するための方策の工夫

今まで、実習生への支援は口頭あるいは文書での助言・指導を中心に行ってきた。この方法を改善し、実習生自身が課題意識をもって実習にあたり、自らの学

習を自己評価、点検しつつ実習を進め、達成感を味わったり、次への課題を自覚し、意欲が喚起されるようにしたい。

そのため、実習生が自分の学習を振り返り、次へつなげられるようなワークシートを作成したい。具体的には、Jack C. Richards and Charles Lockhart (2000) が提唱しているアクション・リサーチの技法を取り入れ、養成したい力の観点別に実習生が自分の授業観察の視点や授業を改善していけるように工夫したい。実習中はこのワークシートを元に、実習生と指導教官が検討を加えるようにすれば、実習生も達成感を味わいつつ、実習を深化させていくことが期待できると考えている。

③実習内容の見直しと検討

実習生が最も苦勞するのが指導案作成と、授業で使う英語（例文選定、Classroom English の使用等）、そして評価言である。

評価言については、山下（2000）が言葉かけを以下のように分類している。

- ア、子どもの学びや自立を受容・共感したり、それを価値づける言葉かけ
- イ、子どもの学びや自立を解釈・翻訳・注釈したりする言葉かけ
- ウ、子どもに問い・尋ね・確かめて、彼とその学びや自立を理解する言葉かけ
- エ、学びや自立の困難を共有し、その打開や克服、見通しをひらく言葉かけ
- オ、子どもとのコミュニケーションを抜け・深める言葉かけ

この中で実習生は、ウについてはさほど困難を感じずにできるが、その他のものについては難しいと感じることが多い。言葉かけ、評価言の重要性を理解し、できるようになりたいという期待度が高いが、それだけに自分の現状について不満に感じることも多いようである。

指導案についても、自分の創意を加味した指導案を作成しようとして苦勞することが多い。この苦勞は実習として意味のあるものだと思うが、ここで苦勞するあまり、授業準備がおろそかになってしまったり、忌避感をもってしまうこともまれにはある。

また、英語力の不足から、授業で提示する英語に誤りが多くあり、そのために授業に対してマイナスイメージを抱く場合も見られる。

このように、様々なレディネスをもった実習生に対

して、現行の実習の流れでは対応が難しい場合がでてきている。そこで、実習の内容を見直し検討を加えていきたい。例えば、実習生自身が実習内容を選べるコースを設定することは検討に値すると思う。（評価言について重点的に実習するコースなど）

④学部との連携

ア、養成を主に担当する分野、力の共通理解

実習を終えた実習生に、来年の実習生へのアドバイスとして「実習までにやっておいた方がいいこと」を問うたところ次のような事柄が挙がった。

（2001年9月28日実施。対象：平成13年度英語科実習生4名）

回答のあった事柄の合計38。内訳は（ ）内に表示

◎授業に関すること（合計12）

○英語の面から（7）

- ・自分の英語の力を伸ばしておく（3）
- ・発音の練習（3）
- ・classroom English の練習

○授業構想の面から（5）

- ・自分の担当する学年の教科書の内容を頭に入れておく
- ・自分の担当するプログラムの内容や新出事項を頭に入れておき、どのような流れで授業を進めるか大まかに考えておく
- ・教材を事前にしっかりと研究しておき、関連する資料や教具の使い方を知り、把握しておく
- ・コミュニケーション活動に関する知識や自分のやりたい活動などを考えてみる。様々な資料に当たってみる。
- ・なるべく早くから指導案を考えてみる

◎教育全般に関すること（9）

- ・生徒との接し方を考える
- ・教師として生徒の前で言っていること、悪いことの分別はできるようにしておく
- ・発言や行動に対して常にフィードバックを行えるようにしておく
- ・バイトでもいいので、子どもと接する時間を持つ
- ・大学の授業をきちんと受けて、自分なりの考えを持つ
- ・実習に対する自分の目標・ねらいを決めておく
- ・望ましい教師像とは、を考えておく
- ・何か一つのことをするにしても、目的をはっきりさせておき、その目的に従って行動する構えを身につける
- ・英語だけでなく、自分が興味あることはどんどん

調べて知識を蓄える

◎生活全般 (17)

- ・正しい言葉遣い (4)
- ・字の練習 (3)
- ・挨拶する習慣
- ・社会人としての態度
- ・体調の管理 (2)
- ・生活習慣を整えておく (5)
- ・清潔さ

| | | | |
|---------------|---------------|--------------|-----------------------|
| 生活全般 (46%) | 教育全般 (24%) | 英語力 (16%) | 授 業 構 想 力 (14%) |
|---------------|---------------|--------------|-----------------------|

これを見てもわかるように、実習生が実習までにしておくべきだと感じていることのうち、約46%が生活全般に関することであり、教育全般への心構えや態度が約24%、英語力に関するものが約16%、授業構想力に関するものが約14%である。言い換えれば、実習へ向かう上で重要な要素として認識されているもののうち、実に約半数が社会人としての常識やマナーであり、残りの約半数が大学・学部で学ぶ内容となっている。

前述したように、附属学校は実習校であると同時に義務教育の場であり、生徒の健全な成長と実りある学習を図る場である。少なくとも、授業中に板書したり例文として用いたりする基本的な英語については自信をもって正しく使えるようにしておいてほしいというのが、日々その学級で授業を行い、生徒に対して責任を持つ教員としての願いである。

この英語力の他にも、学部と実習校が共通理解の上に役割分担を図り、養成を担う力の育成に力点を置いて学生の教育にあたれば、より効果的な実習が行われるのではないだろうか。

イ、提言

筆者が学部教官である築道 (1996) の論に触発されて教育実習の改善・工夫の必要性を考えるようになったのはすでに述べた通りである。今までともすれば「教育実習をめぐるのは、『学生の資質低下』に対する認識を、実習校・大学双方の課題として共有し深めあうことよりも、むしろ互いに対する『要望』を交すことが優先し、ともすると双方の指導上の所与性を先鋭化することに終始するくらい」もあったと高旗 (1997) が指摘している。しかし、そうではなく、学部・実習校がお互いに情報を交換しあい、忌憚のない話し合いを通して有為な教育実習を目指すならば、その効果は非常に大きいと考える。両者の共通理解と相互協力が

実習生の実りある学びのためには不可欠であろう。

また、『今後の国立の教員養成系大学・学部の在り方について』(2001)においても教員養成に関する共通的な認識の醸成とモデル的な教員養成カリキュラムの作成が求められているところである。

そこで、以下のことを提言し、その実現の方向あるいは可否を探っていきたい。

○学部は、実習生について、事前に情報を実習校に伝え、各々の実習生についてどのような力を養成したいのか実習校と打ち合わせをする。

現状では、事前に問い合わせをしても、「時間にルーズで迷惑をかけるかもしれません」というような回答に終わっている。実際には当該実習生について、1番の問題点は英語力の不足とそれに伴う授業立案、準備の難しさであった。これは大学側の認識と現場の認識のずれを意味していないだろうか。これを克服すべく、事前の打ち合わせが必要ではないだろうか。

○現在大学教官は実習期間中、授業視察に来るという形で実習に参画・協力している。これに加え、授業研究会にも参加し、学部での学びを実習につなぐ指導や実習校教員との共通理解を図れないだろうか。

○ただし、実際には実習期間中に大学関係の各種会議が開催されたり、出張が入ったりという実情がある。そこで、上記提案を補完するものとして、あるいは実習期間中、半日程度を実習生との教育相談にあてることはできないだろうか。

○実習後、指導教官は実習生の今後の課題についての意見を大学教官に伝える。(成績通知のみに終わらせない)

○院生もしくは上級生によるピアサポート体制を作る。

平成13年度実習期間中は、前年度に教育実習を履修した院生が研究のために実習校に通っていた。

その中で以下の利点があった。

- ・自分の実習経験に照らし合わせ、的確なアドバイスを実習生に与えることができた。
- ・年齢も近く、前年に教育実習を経験していることから、実習生にとっては身近な存在で、相談しやすかった。
- ・授業研究会にも自主的に参加してくれ、授業を見る視点のよいモデルとなった。
- ・指導教官の指導をどう捉え、生かすべきかの視点を実習生に示し、助言した。

このように、近年に教育実習を経験した上級生の存在は非常に大きかった。今後、院生もしくは上級生の

うち、意欲と実力のある人（ピア）が教育実習期間中に実習校に常駐し、その人の研修や学習に役立てると同時に、実習生の支援にあたる体制は作れないだろうか。

○実習前にハードルを設け、実習生の達成目標を明示する。

NHK ニュース7（2002年1月12日）での報道によると、在京の医大では実習に出かける前に大学で対人能力テストを行い、現場の患者との触れ合いに適應できる医大生を実習に送り出す試みを始めたという。教育界においてもこのような試みはあってもよいのではないだろうか。

あるいは④アでも述べたように、英語科実習の履修条件に、高校入試程度の英語力を身につけていることを加えることはできないだろうか。

⑤初任者研修との連携・役割分担

近年、ますます初任者研修の内容が充実してきている。教育実習ではどの力をどこまで養成すればいいのか等を明らかにすることは、教育実習のねらう重点を明確にすることに資するだろう。今後、初任者研修についても調査し、役割分担を明確にし、連携を図っていきたい。

既に香川県では香川大学教育学部と意見交換会を開き、現場の実態にあった教員の養成など各事業で協力していく構想を練っているという。（『内外教育』2002.2.19）このような動きを参考にし、検討を加えていきたい。

おわりに

次代の教育を担う、実力ある教員養成は時代の要請でもある。その責務を自覚し、今後も実りある教育実習を目指して実践と工夫を重ねていきたい。

最後に、本原稿執筆にあたり、担当実習生の2人には資料提供を快諾し、協力をいただいた。氏名の公表は控えるが、2氏の実習に対する真摯な姿勢・努力に敬意を表し、感謝する。

参 考 文 献

邦 訳 文 献

Jack C. Richards and Charles Lockhart (1994), *Reflective teaching in Second Language Classrooms*, Cambridge University Press, Cambridge.

(新里眞男訳 (2000), 『英語教育のアクション・リサーチ』東京：研究社出版。

和 書 文 献

『新たな時代に向けた教員養成の改善方策について（教育職員養成審議会・第1次答申）』（1997），教育職員養成審議会。

『今後の国立の教員養成系大学・学部の在り方について—国立の教員養成系大学・学部の在り方に関する懇談会報告書—』（2001），国立の教員養成系大学・学部の在り方に関する懇談会。

『島根大学教育学部における教育実習系カリキュラムの指針』（1999），教育実習系カリキュラムに関する学部—附属学校連絡協議会。

高旗浩志（1997），「教育実習生」をめぐる言説空間（1）—教職志向と学生文化との関わりを中心に—『島根大学教育実践研究第9号』島根大学教育学部附属教育実践研究指導センター，pp.125-141。

築道と明（1996），「教育実習時に教育実習生が直面する問題の分析—日記の記述を通して—」『島根大学教育実践研究第6号』島根大学教育学部附属教育実践研究指導センター，pp.23-37。

『内外教育』（2002），2月19日，第12面，「教員養成などで大学と連携（香川県）」。

三浦省吾他（1998），「これからの英語科教員養成の課題（1）—広島大学附属中・高等学校における実習生のつまずきをめぐって—」『広島大学教育学部・関係附属学校園協同研究体制研究紀要第26号』広島大学教育学部・関係附属学校園協同研究体制，pp.55-62。

三浦省吾他（1999），「これからの英語科教員養成の課題（2）—教育実習生による中学校の授業に焦点をあてて—」『広島大学教育学部・関係附属学校園協同研究体制研究紀要第27号』広島大学教育学部・関係附属学校園協同研究体制，pp.53-60。

三浦省吾他（2001），「これからの英語科教員養成の課題（4）—時代の要請に応える英語科教育実習を求めて—」『広島大学教育学部・関係附属学校園協同研究機構第29号』広島大学教育学部・附属学校園協同研究機構，pp.141-148。

山下政俊（2000），『21世紀型授業づくり12 学びの支援としての言葉かけの技法』東京：明治図書。

参考資料 「基礎実習の流れ」 島根大学教育学部附属中学校

注：課程必修実習は基礎実習とも呼ばれている。

| 目標と 内 容 | | 基礎実習 I | 基 礎 実 習 II | | | |
|--|--------------------------------------|---|--|---|--|---|
| | | 前期1週 | 後期1週 | 後期2週 | 後期3週 | 後期4週 |
| 各 内 容 に お け る 実 習 目 標 と 具 体 的 な 実 習 内 容 | 目 標 | ◎実習についての概要と意義を理解し、心構えを築くと共に、指導に関する基本的な知識、技能を習得する。 | ◎中学生の学習及び生活の指導に関する基本的な知識、技能の向上を図る。 | ◎中学生の学習や生活について自らの創意を加味し、実習に生かす。 | ◎中学生の学習や生活について自らの創意をいっそう加味し、実習を深める。 | ◎教育実習の成果を反省し、将来への展望に資する。 |
| | 実 習 の 主 な 内 容 | ・教官の指導のもとに、視点をもち要点を押さえた授業参観記録や生徒観察記録をとることができるようにする。 | ・教官の指導のもとに、指導案の作成から授業の侍史、授業研究に至る一連の過程を体験する。また、清掃・終礼などを通して生徒指導を体験する。 | ・教官の指導のもとに、各教科の指導案(略案)を作成し、1単位時間に授業を実施し、指導技術の向上を図る。また、清掃・終礼等を責任をもって指導できるようにする。 | ・教官の指導のもとに、各教科の指導案(略案)を作成し、1単位時間の一斉視察授業を実施し、指導技術のより一層の向上と深化を図る。また、清掃・終礼等を責任をもって指導できるようにする。 | ・教官の指導のもとに、道徳並びに特別活動に関して、指導案の作成から、授業研究に至る一連の過程を体験する。また、チームティーチングの方法を工夫する。 |
| | 具 体 的 な 実 習 事 項 | ◆授業観察記録及び生徒観察記録をつける。 ◆各教科の指導教官とのチームティーチングの実施(1時間) ◆教育実習に関するレポート作成 | ◆生徒観察記録をつける。 ◆教育実習生同士のチームティーチング授業の実施(1時間) ◆実習生の授業を元に、各教科で授業研究会を実施する。 | ◆生徒観察記録をつける。 ◆教育実習生が各教科の授業を実施(1時間以上) or ◆実習生の授業を元に、各教科で授業研究会を実施する。 | ◆生徒観察記録をつける。 ◆教育実習生が各教科の授業を実施(1時間以上) or ◆実習生の授業を元に、各教科で授業研究会を実施する。 | ◆生徒観察記録をつける。 ◆道徳・特別活動の授業をチームティーチングにより各学級単位で授業公開し、学年単位で授業研究会を行う |

この基本的な流れに各教科の工夫が加味される。また、実習生の自主的な学びも加わる。例えば、授業を見る視点や、反省を次回に生かす力が付いたと感じていた実習生Bの場合、実習後期にも授業観察記録をつけ、自主的に実習を深めていた。

(なかがま ともこ・英語科) E-mail アドレス：nakagama@edu.shimane-u.ac.jp